

日本IT書紀

008 わたくしごと

02 溟滓篇
卷之一 契機

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第八

わたくしごと

一

わたくしごとから書き起こしたい。

オイルショックという出来事があった。

原油の価格が二か月で四倍に跳ね上がった。町の店先にトイレットペーパーや洗剤を買い求める長い列ができた。

原油が値上がりするとなぜトイレットペーパーや洗剤が不足するのか、因果関係がはっきりしないまま、物価が上がりが商品が品薄になり、企業は採用を半減した。

——オイルショックですから。

というだけで、何となく通用した。

そのお鉢が回りまわって、内定取り消しというかたちで我が身に降りかかるとは思ってもいなかった。今のように「フリーター」というような言葉がなかった。

アルバイトで始めたのはトラックの仕事だった。東京の麹町にある会社の社内メール便の仕事から始め、次に大きくて重い機械を運ぶようになった。その関係で三島や御殿

場に週一回のペースでトラックまたはライトバンを走らせた。

会社の名前は「バロース」というのだった。

事務所で伝票を受け取り、平和島の倉庫から積み出す。

港に荷揚げされたときのまま、ダンボールと木枠で梱包されたマシンの、薄暗い倉庫に並んでいる。どれもこれも同じように見える。型式と品番を書いたラベルがその隅っこに貼ってあって、それを懐中電灯で照らして出庫指示の伝票と付け合わせればいい。

運び出すには専用の台車かフォークリフトを使う。

フォークリフトは、左に進むには右に、右に進むには左に、ハンドルを切る。分かってしまえばそれだけのことなのだが、最初はひどく戸惑った。

そのうち、自分が運んでいるのはどうやら「コンピュータ」というものであるらしい、ということが分かってきた。一台で何千万円、何億円もする。

——運んでいる途中で壊れたら、一生かかっても弁済できないぞ。

などと脅かされた。保険をかけてある、などということはない。

幌つきの荷台に、使い古しの毛布でくるみ、ロープで何重にも固定する。輸送中に倒れたり、他の機械にぶつかっ

たりするといけない、という理由で、急ブレーキ、急ハンドルは御法度だった。代りに届け先への到着時間はゆつたりしていた。

ビルに運び込む場合には、廊下にベニヤ板を敷き詰め、エレベーターの内側にクッションを貼る。本体の下にローラーが付いているのだが、重すぎるために痕がついてしまう。そのためにはまず、管理会社の了解を取り、守衛さんに断りをいれなければならない。

コンピュータが大きくてエレベーターに入りきらない場合は、クレーンで吊り上げる。ときには窓枠を外し、壁を壊すこともある。

地方都市で、運び込むビルにエレベーターがついていないことが分かったときなどは、天を仰いだものだった。出るのは愚痴のため息でしかない。コンピュータをいくつのかたまりに分け、幅の広いベルトを肩にかけて、四人、五人の力で階段を持ち上げていくのである。

当時のコンピュータは、小さいマシンでも優に百キロ以上、場合によっては数百キロということもあったし、四角とは限らない。パンチマシンはデコラの板が厚く、あちこちが角ばっていて運びにくかった。周辺機器も同じ方法で運び上げる。かなりの重労働だし、支えている一人がこければ大怪我につながる。

二一

あるとき、大阪の吹田にコンピュータを届ける仕事があった。東京を出発したのは午後四時だった。東名高速に乗ってしばらく行くと、大渋滞に巻き込まれた。

「この先、通交止め。一般道に迂回せよ」という。

大井松田インターチェンジで国道二四六号線に下りた。そこも大渋滞だった。二進も三進も行かない。わき道に入っても同じだった。長距離トラックのテールランプが長蛇の列をなしている。

今のように道路情報が的確に提供されていなかったし、カーナビゲーションや携帯電話があるはずもない。この先で何が起こったのか、さっぱり分からない。深夜では荷主に連絡することもできない。

ほんの少し動いては止まり、十分ほど止まっては少し動く。いくら待っても動かないので、前に止まっているトラックのドアを叩くと、運転手が居眠りをしていて、というようなこともあった。

ともあれ、芋虫のようにじりじりと進み、浜松のあたりで長い夜が白々と明けた。

再び高速道路に上がっても渋滞は続いていた。今度は養老サービスエリアのあたりでトラックが転倒しているという。寝不足に渋滞の疲労が重なったのに違いはない。再び一般道に下り、夕刻、ほうほうの体で吹田にたどり着いた。

公衆電話から届け先に

「いま、近くまで来たのですが」と連絡した。

このとき、初めて通行止めの原因を知った。

——田子の浦の近くにあるトンネルで百三十台以上の車両が燃えた。

という。

教えてもらった目じるしを目当てに探し探して進むと、ねずみ色の作業服を着た人のかたまりができていた。トラックを進めると人が両脇によけ、どうやらそれは届け先の工場の人たちで、自分に拍手を送っているらしいことが分かった。

荷主の会社の営業マンが駆け寄ってきて、

「よく届けてくれました」と肩をたたいた。

「もうダメかと思った」

その意味がすぐに理解できなかった。

「もう一時間早く出発していたら、君も事故に巻き込まれていたかもしれない」

納入先の人

「無事でよかった。食事と仮眠の部屋を用意してあります」

と言った。

到着が半日以上遅れたのに、礼を言われるとは思っていませんでした。彼らは真剣に、わたしがトンネルの中で焼け死んだのではないかと心配していたのだった。

雪の道ではタイヤにかけるチェーンが凍って、素手で掴むと大変なことになった。大雨の時にワイパーが故障して動けなくなったこともあった。梱包のダンボールをカッターで切っているうち、ダンボールの切り口で手のひらをザツクリ裂いてしまったこともあった。

苦しいこともあったが、楽しんでもいた。

それが縁で、ある受託計算センターに仕事を得た。

プリンターが吐き出した連続帳票を段ボールの箱に詰め、営業所に配って行く。そのときに受け取った伝票がパンチされてコンピュータにかけられる。

コンピュータ・ルームは寒いくらいに冷房が効いていた。真夏に外から戻ると、真っ先に飛び込んだものだった。

「いやあ、涼しい、涼しい」

半袖で大汗を拭うその脇に、カーデイガンなどを羽織ったオペレーターの人たちがいた。冷房が効いた部屋に閉じ

こもって仕事をしているのだから無理もなかったが、今から思うと珍妙な風景だった。

三

この時代のコンピュータ処理はパンチカードと磁気テープが中心だった。パンチカードには一行が八十桁と九十桁の二種類があつて、八十桁はIBMタイプ、九十桁はUNIVACタイプだった。

黄色を帯びた薄めの厚紙（まことに珍妙な表現だが）に、赤い線で孔を開ける欄が印刷されている。それがパンチマシンに送り込まれてきて、キーボードを打つ。キーボードで打つと、パンチカードに孔が開く。

その作業を「穿孔」といった。

穿孔室に入ると、何十人ものパンチャーが打つキーの音がけたたましかった。チーム・リーダーと作業の打ち合わせをするには、部屋の外に連れ出さなければならぬ。

穿孔されたカードは、順番に並んでストックされていく。その順番が狂うとたいへんなことになる。プログラムであればコーディングのライン順、データであれば伝票の順にカードが並んでいるわけだから、カードを納めた長細い箱（これが重い）を無造作に扱ったり、まして床に落として

カードを散乱させたときには、

——あーッ。

という悲鳴が周りから上がったものだった。

もう一度、最初から並べ直さなければならぬ。カードを読み取って、自動的に正しく並び換える専用の機械もあつたが、人海戦術でワツサワツサとやったほうが早かつた。それから数日は、皆から口を利いてもらえない。

——というようなことはなかったにしても、パンチカードこそ、計算センターのイノチだった。

磁気テープは、映画館でかけるフィルムのように大きなリールに巻き取られていた。それを何本も腕に通し、コンピュータ・ルームに運んでいく。当時、計算センターのコンピュータ・ルームは冷房がひどく効いていたこともあつたのだが、何となく、研究室のイメージがあつて、白衣を羽織ったオペレーターやプログラマーが少なくなかつた。

大規模なシステム開発には、「ディスクパック」というものを使った。パンチしてコンピュータに読み取らせるプログラムを記録するのである。いまでいうリムーバブル・ハードディスクだが、容量は一メガバイト程度しかなかった。そのくせ、とにかくべらぼうに高かつた。

コンピュータ・ルームの中央に、デン、と据えられるほど高価な装置だった。それを持ち運ぶのはSE、つまりシ

ステム・エンジニアの象徴であり、特権のように考えられていたから、重いのも我慢して胸を張って歩いたものだった。

少量のデータを記録するには、カセットテープを使った。ラジカセやコンポ・ステレオの音楽用カセットと変わらない。ガソリンスタンドの売上げ伝票など細々したデータを、ユーザーが専用機で入力し、カセットテープに記録した。そのカセットを計算センターに集めて、大型コンピュータで一括処理をする。ある意味ではバッチ型の分散処理だった。

あるとき、黒いソノシートが入った大きな、ほぼ正方形の封筒が手渡された。封筒の中央には丸く穴が開けられている。「磁気テープの代わり」という。

ソノシートというのは、薄いプラスチックでできたレコードのことである。筆者の子どものころ、童謡全集、世界名曲全集といった本の裏表紙に付いていた。向こうが透き通って見えるほど、薄い。グリーンやブルーの色が鮮やかだった。

手渡されたそれは、「フレキシブルディスク」略して「FD」というのだった。大きさからして十二インチのFDだったであろう。のちに八インチ、五インチと小型化し、ワープロやパソコン用にプラスチックのケースと金属のシ

ャッターが付いたとき、「フロッピーディスク」という呼び名が一般化した。

「少量のバッチデータであれば、これで十分」

という説明を受けた。だが、ペガペガで、いかにも頼りない。それにディスクパックと比べ、自慢気に持ち運ぶことができない。

——こんなものが信用できるか。

と思ったものだった。

朝早くに出勤すると、応接室のソファはもろろん、事務所の机の上といわず通路といわず、プログラマーやオペレーターが眠りこけていた。それは男性に限ったことではなかった。さすがに女性たちには会議室や応接室が割り当てられていた。

しばしば彼らに乗せて、早朝から開いている喫茶店や牛井店に行った。仕事が終わるまでが仕事、という意識もあつたろうが、全員が若く、独身の者ばかりだった。そのために大学のクラブや同好会の合宿に似た雰囲気がないでもなかった。次から次に仕事があつたが、そのうちの二割か三割はやらなくていい仕事、つまりミスのリカバーだった。

当時の計算センターは、しばしば業務が中断した。プリンタや連続帳票を切り離す「デイタッチャ」という機械が故障すると、コンピュータによる処理を続けることができ

なくなつた。それは複雑な構造をした機械が持つ物理的な問題だった。

ところがコンピュータのトラブルは、多くは操作する人間のミスだった。

プログラムやJCL (Job Control Language) に矛盾があれば、システムはabend (Abnormal End: 原因不明の停止) を起こし処理を進めてくれないし、コンピュータがはじき出す数値が間違っていたとしたら、それは人間の指示に従つて正しく間違つたに過ぎない。そういう賽の河原のごとき徹夜の作業が毎日のようにあつた。

~~~~~ 補注 ~~~~~

オイルショック 一九七三年十月、第四次中東戦争をきっかけに石油危機が発生し、石油の価格が二か月で約四倍に値上がりした。これにより日本は経済的な打撃を受け、一時的なパニックによってトイレトペーパーや洗剤が店頭から姿を消す騒ぎとなった。また企業は新規採用を一斉に手控えたが、すでに新卒者採用が終わったあとだったため内定取消が多発した。石油危機を契機に、政府は石油備蓄を強化するとともに、代替エネルギーの開発や省エネルギー技術の研究に力を入れ始めた。一九八〇年には背広を半袖にした「省エネルギー」が売り出されたりした。

日本坂トンネル事故 一九七九年七月十一日、東名高速道路下り線の「日本坂トンネル」(全長二〇四五メートル)の中で、トラックと乗用車が衝突した。後続車両七台が止まりきれずに玉突きでぶつかり、後にトラックの荷物が発火してトンネル内に煙が充満した。避難のため置き去りにした車両百七十三台が次々に炎上し、七人が死亡、六十五時間も燃えつづけた。鎮火後、トンネル内の残骸を片付けるのに十日を要し、全面復旧するまで二か月間、上下片側一車線が仮開通した。物流の停滞など被害総額は約六十億に達した。

コンピュータ・ルーム 古くは「IBM室」、一九七〇年代は「電算室」「マシン・ルーム」などと称した。大型コンピュータを設置するには、コンピュータが発する熱を冷却する特別な装置や高電圧の配電が必要だった。そのため受託計算センターは二重床に配線を収納し、耐火・耐震設計の特別な部屋を用意した。コンピユ

ータ・ルームへの出入りは通産省が定めた「情報処理システム安全対策基準」の入退室管理規定に基づいて厳しくチェックされ、暗号キーが記録されたカードを差し込まないとドアが開かない仕掛けが施されていた。またコンピュータ・センターでは建物や事務室への出入りであっても所属や氏名を記帳しなければならなかった。

フレキシブルディスク 命名したのはIBM社である。日本工業規格では「フレキシブルディスクカセット」。

フロッピーディスク フロッピーの原意は「パタパタした」「クタクタとした」。初期のフロッピーディスクは直径八インチサイズが普通で、プラスチックの筐体も金属製のシャッターもなく、紙でできたケースに入っていた。パタパタ。クタクタという形容はまさにぴったりだった。

日本IT書紀 008 わたくしごと

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。